



Title	食と生きざま
Author(s)	西川, 勝
Citation	臨床哲学. 2002, 4, p. 102-106
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8936
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

食と生きざま

西川 勝

「猿を聞人捨子に秋の風いかに」という芭蕉の句がある。今回のテーマで書きあぐねていた僕にとりつくように迫ってきた。破調の句は、読後のいやな感じをぬぐい切れない。「野ざらしを心に風のしむ身哉」「しにもせぬ旅寝の果よ秋の暮」という句もある『野ざらし紀行』に、あるエピソードと共に書かれた句である。芭蕉が旅の途中で、捨て子と出会う。このままでは遅かれ早かれ、この子は生きてはいけないであろう。しかし、芭蕉も死を覚悟した旅の途上にある。この捨て子を連れて行くことは叶わない。芭蕉は「己の運命を泣け」とつぶやき、その場を後にした。捨て子をさらに見捨てること。芭蕉は、猿の声に断腸の思いを聞く文人たちへの強烈な揶揄を、破調の句に成した。やり場のない怒りと悲しみは、芭蕉自身を貫いている。人が人に出遭ってできること、その場に居ることと、立ち去ること。ケアは二つの相に分かれざるを得ない。ゼロから無限にいたる距離という観念で、この断絶をうやむやにすることも可能だが、論理的に可能なことが、人を納得させる理屈にはならないのが、生き難さの根本でもある。

看護という職業で、日々を送る僕は、さまざまな人生模様を垣間見る。相手のことを知りえるのは、ほんの僅かだが、そこから看護をはじめのほかはない。よく唱えられる全人的ケアへの欲望は、幾度も潰え去る。一度きりに終わらない断念の苦さに辛うじて耐えるは、何故だろうか。寄せる思いが実を結んだとは到底思えないある人のことを、もう一度思い返すなかで考えてみる。

身寄りのない初老の男が病院で死んだ。彼は僕が勤めている老人保健施設に1年余りの間入所していた。彼の名前をSさんとする。ある福祉事務所からの電話が、Sさんの死を知らせた。彼が退所してから3年の歳月が過ぎていた。福祉の担当者は、Sさんの葬儀をするのに故人の写真が一枚もないので、亡くなった病院に来るまでに転々とした施設に写真はないかと問い合わせていたらしい。病院で撮る写真は体の内部。葬儀にレントゲン写真は役に立たない。老人保健施設では、レクレーション風景などの写真を撮ることが多い。数枚の写真に彼の姿が残っていた。そのうちの一枚が郵送された。

クリスマス会に参加したときの写真。痩せて小柄なSさんが、大きすぎてだぶだぶの縦縞ジャケットを着込み、サングラスで格好つけている。歯が1本もなく入れ歯もしない口元は、凄みを利かせるには少し無理がある。彼には悪いが、ちょっと滑稽に見える。しかし、Sさんを少しでも知っている者には、切ないほどに彼の気骨が伝わってくるいい写真だ。

Sさんは口から食べることができない人だった。入所時に持参した看護サマリーからその経緯を抜書きする。

- ・ Sさん。男性、71歳。
- ・ 平成元年ごろ、脳外科入院。平成9年脳外科病院入院（病名不明）
- ・ 平成10年4月9日、駅改札口で倒れているところを発見。救急車で脳外科病院に入院。脳梗塞の診断。右上肢麻痺（三角巾）、嚥下および咀嚼障害あり。4月20日経鼻胃チューブ自己抜去。5月7日胃ろうチューブ造設。会話困難あり、意思疎通不可。リハビリ室への出棟で興奮。ベッドサイドリハのみ。喀痰喀出困難、吸引。
- ・ 平成10年9月17日、G病院へ転院。リハビリ拒否。注入食拒否。寝ている間に注射器ですばやく注入。注入後の白湯、薬拒否。散歩や売店で買い物は楽しそう。好きなものを少量、口に入れてじっくり味わってから吐き出す（ナースの勧め）。便通確認はできない、怒り出す。左聴力なし、右難聴。意思疎通は筆談。失語症で書字の判読困難。
- ・ 平成10年10月21日、G病院から老人保健施設へ入所。

障害、困難、拒否と、ネガティブな表現が連ねられる。問題解決志向のケアプランにはうってつけの利用者だ。事の成否はともかく、ケアする者にとっての課題には事欠かない。ケアのベテランにしろ初心者にしろ、とにかく気になる目立った存在であるには間違いない。このようなケースの場合、心理社会面でのアセスメントが重要だというのはケアにおける常識になっている。しかし、肝心のSさんの生活背景に関する情報は、ほとんどないに等しかった。入所時の相談記録にはこう記されている。

- ・ 愛知県出身。廃品回収業。独身。身寄りはない。酒（－）、タバコ（－）。
- ・ ホームレス生活だったところ、M神父が生活保護手続きをしてアパート暮らし。入院中にアパートの補助金打ち切り。

身近に感じる事のないホームレスという経歴。生涯のほとんどが謎に包まれていることで、ケアスタッフの関心は、Sさんに対する勝手な想像の世界を手探りした。相談員からの情報だけが頼りであった。

修道会の神父として釜が崎に住み込み、リヤカーを引いていたM神父は、ある暑い日にSさんと出会う。坂道で、Sさんが小さな体でリヤカーを引き上げていたのを、少し後押ししたのがきっかけだ。はじめは偶然であった二人の関係が次第に緊密になっていった。多くのホームレスの人たちとかかわりを持った神父にとっても、面倒な生活保護の手続きを最後まで我慢したSさんは珍しい人であった。どんな過去がSさんを孤独に追い込んだのかは分からないが、神父との出会いがその人生を大きく変えたのは確かだ。看護者という役割を離れた街中では、路上に寝転ぶ人の姿を見捨て続けている自分にとって、神父とSさんの関係はまぶしく思えた。しかし、そんな善意物語は勝手な空想だっ

たことが、すぐに分かった。Sさんは人の善意に沿って生きるなどということは断固として拒否するつわものであったのだ。老健に面会にくるM神父にことばにならない怒声を浴びせかけ、今にも殴りかかりそうな勢いで追い詰めるSさんの姿に圧倒されてしまったのだ。質素な身なりで、自分で用意したおにぎりを弁当に持ってくる神父に、なんとも気の毒であったが、Sさんの怒りは止むことがなかった。アパートが引き払われたことに対する不満や、未だ、形にならない怒りまでが神父に向かって投げつけられていた。そのうち、神父はSさんに会うことをあきらめて、用件だけを引き受けていた。ナースが痰の吸引をするたびに、深々とお辞儀をして礼をいうSさんとは思えない行動だった。

老健でのSさんの暮らしぶりは、生真面目さと突然の怒りとのあいだで揺れていた。4人部屋のうち自分のベッドを昼間からずっとカーテンで閉め切り、誰も入らせない。同室の痴呆の人が、カーテンを触るだけでも「アッー、ウッー」と言葉にはならない怒りの声で威嚇し、職員がなだめに入っても、おさまる様子にはなかった。下手をすると止めに入った職員に暴力行為さえ見られた。身長147cm、体重37kgと小柄であるが、怒ったときの力は若い男性職員でも手を焼くほどであった。人の邪魔さえなければ、自分のベッドや、たんすの中は左手だけを使い整理していた。麻痺のために、利き手の右手が使えないのでずいぶんと時間をかけていたが、衣類や私物の細々とした物をきれいに片付けていた。もともと几帳面な性格であったことが、生活ぶりの端々にうかがえた。施設のプログラムにある集団体操やサークル活動、レクリエーションにみんなと参加することはほとんどなく、カーテンの中でごそごそしているか、ベッドに横になっていることが多かった。入所者の多くが階下のデイルームに降りて人影がまばらなときには、談話コーナーの隅で、ラジオ体操を一人で熱心に行っていた。自分の意志では動けなくなった右腕を左手で上げ下げして、関節が固まらないようにしていた。

こんなふうに、人とは離れていることを常とするSさんが、私たち職員に近づいてくるのは、胃ろうから注入食を入れるときと、痰の吸引を頼みに来るときぐらいだった。コミュニケーションはとりにくいが、痴呆の人とのトラブル以外に、これといった問題もないSさんは、そのうち、目立たない人になりつつあった。

しかし、入所して2ヶ月になろうとしたころ、注入食の拒否が始まって状況は一変した。Sさんは、唾液を飲み込むことさえ難しく、睡眠中などに無意識に気管へ誤嚥していた可能性もあり、慢性化した呼吸器系の炎症に悩まされていた。痰は粘っこく、咳き込んでも、なかなか口の中まで出てこない。口まで来ても、舌の運動がスムーズでないで、うまく吐き出せない。Sさんは、いつもティッシュペーパーで口の中を拭き取っていた。それでも、どうしてもなく、苦しいときに看護婦に吸引を頼みにくるのだった。

そんなSさんが口から食べたり飲んだりというのは、まさに自殺行為としか思えないのだが、彼は胃ろうからの注入食や水分を拒否して、売店で買った丸ボーロを口に含み、ゆっくりと飲み込むという作業を続けた。ケアスタッフ全員によって、何度も経口摂取の危険性について説得が試みられたが、相手にされなかった。医師の指示で、食道から

胃への造影検査がなされたが、糸のように細い通過が認められただけであった。それでも、Sさんが慎重に嚥下を試みている場合、明らかな誤嚥はないという所見だった。Sさんの頑固さを考慮して、しばらく様子を見るしかなかった。注入食の拒否はおよそ1週間に及んだ。からだが衰弱しているようには見えなかったが、もう、何らかの対策を講じなければと皆が真剣に考え始めていた。

Sさんは、売店に行っては、丸ボーロや牛乳を買って帰り、カーテンの中で、孤独な試みを繰り返していた。ベッドの横にあるゴミ箱はティッシュペーパーで一杯になっていた。赤ん坊が食べるものと真剣に格闘している姿は、切ないものがあった。買い物に付き合う職員に千円札を気前よくチップとして渡し、何度断っても受け取ることがなかったので、事務所にSさんのお金として再度入金するということが続けられた。Sさんの渡したチップの総額は、生活保護費に近づくほどだった。こうした行為も、Sさんの誇りを支えるものであった。チップをいくらあげても、お金は事務所から黙って戻ってくる。この奇妙な贈答関係にSさんは気づくことはなかった。

それにしても、一体いつこんな拒食の関係が終わるのかと不安になっていたとき、Sさんが、注入食を再開した。拒否を始めたときも理由はわからなかったが、それが終わったときも同じだった。彼の気持ちが変わったことと、自分たちのケアとの関連がどうしても見えてこない。Sさんに、振り回されているという感じがした。しかし、少しずつSさんの行動には変化が現れてきていた。たとえば、注入食を入れるイリゲーターやチューブを自分で洗いはじめたのだ。缶詰の注入食を入れる前にガーゼで漉すという儀式も始まった。注入食のスタンドも、Sさんの私物のようにベッドから離れなくなっていた。徐々にSさんは、胃ろうからの注入食の方法を自分なりのスタイルに変えていったのである。普通、注入時の体位は少し上体を挙げた形にするのだが、Sさんは水平に横になったままで、注入のスピードも基準より速めてしまう。医学的にはよくない方法なのだが、職員からの指示を非常に嫌がるSさんを説得するのは困難であった。

胃ろうからの注入方法をSさん流に完成させると、次は吸引の自己実施を、要求するようになった。多少細かな操作を必要とする喀痰の吸引は、なかなか上手くできなかったが、諦めることはなかった。吸引の仕上げだけをナースが手伝うことにした。Sさんが生きるために必要な技術を自分のものにしようという気持ちが痛いほど伝わっていたからである。

決して満足に痰の吸引ができるようになったわけではないが、自分専用の吸引機も購入してベッドの横に置くようになった。カーテンの内側にSさんの世界が出来上がってきた。

現実的には、Sさんがもう一度アパートを借りて一人暮らしをするというのは不可能であったが、退所の話が出るたびに、Sさんは読みにくい字でアパート暮らしへの希望を伝えた。鉛筆の先が折れるように力を込め、ギザギザに筆跡が折れ曲がりながら「アパート」と書き上げるSさんを見つめる間、息が詰まるような気迫を感じていた。絶望や妥協とは断固とした一線を画するSさんの生きる姿勢には、理解を超える不気味な力があつた。

さまざまに、強烈な印象を与えたSさんも、遠く離れた療養型病院に移ることが決まった。Sさんを見送るとき、それまで見たこともないようなSさんのすがすがしい表情に、職員は軽いショックを覚えていた。ほんの少しくらい悲しそうにしてくれてもいいじゃないか、という思いがあったのである。転院先の病院からの迎えの車がSさんを乗せて去ってしまうと、ある種の脱力感に襲われた。

自分たちケアスタッフが、Sさんの意向をできるだけ尊重したつもりでも、Sさんには一日も早く立ち去りたい不自由な施設でしかなかったのだ。お互いの思いは交差することなく離散した。「それで、よかったんだ」と、いまは思える。Sさんの生きざまに触れたあの日々は、確かにSさんと共にいたのだから。

捨て子に別れを告げた芭蕉は、人が人にできることの限りを嫌というほど自覚していた。見捨てるほかなかった芭蕉と、飢えに泣く捨て子の出会いは無意味であったのだろうか。二つのいのちが、閃光を発するようにその切っ先を触れ合わせる一瞬。どんな結末がその後に続こうとも、それはいのちの物語である。ケアはいのちの物語だ。そこには喜びも悲慘も人の生きるさまと同じく限りなく存在する。